

令和7年度 未来を拓く生徒主体の授業づくりプロジェクト計画書(報告書)

学校番号	29	学校名	甲府工業高等学校	全・定・通	定	在籍生徒数	36 名
スクールポリシー (学力に関するもの)		「質実剛健」を校訓とし、「技術者となる前に人間となれ」を信条に教育活動を行う。卒業後地元企業へ就職できる人間性や技術力を身に付けさせるとともに、新しい時代に必要となる次の資質・能力を育み、地域社会や産業界に貢献できる人材の育成を目指すために、基礎的・基本的な学力の定着を図る。(①主体的・対話的で深い学び, ②自己肯定感・自己実現, ③コミュニケーション力)					
グラデュエーション ポリシー		①課題発見力 ②論理的思考力 ③課題解決力 ④知識力 ⑤技術力 ⑥創造力 ⑦コミュニケーション力 ⑧社会人倫理力 ⑨学びに向かう力(主体性) ⑩表現力					

生徒主体の授業への転換のための取組テーマ	
<input type="checkbox"/>	自ら自己調整をしながら学習を進めていくことができる自立した学習者づくり
<input type="checkbox"/>	目標の実現に向けて生徒が自己選択や自己決定を行う機会の創出
<input type="checkbox"/>	主体的・対話的で深い学びの視点による授業と評価の改善
<input type="checkbox"/>	ICTの利活用による「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実
<input type="checkbox"/>	文理の枠を越えた教科横断的・総合的な探究課題への取組

具体的な取組	
授業前後の短時間型サイクルによる主体的学習の促進	
<p>実習科目を中心に、授業前の基礎確認および授業後の短い振り返りを標準化した。</p> <p>生徒自らが前時の改善点を確認し、次時に生かす流れを定着させることで、学習への見通しをもち、自らの課題に気付く力が向上した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 実習前の「手順・基礎知識の30秒確認」 ・ 実習後の「できたこと／改善点を1つ書くミニ振り返り」 ・ 改善点を基に次時の個人目標を自分で設定 	

「生徒主体の授業への転換のためのアンケート」高評価数値の推移(%)		R7中間	R7末
(各校の授業アンケートに基づく)			
1.自ら学習課題や学習方法を選択して自主的、自発的に学習に取り組むことができた (①強くそう思う, ②そう思う)		62.9%	65.9%
2.活用や探究など、学んだことを別の場面で使うようにすることができた (①強くそう思う, ②そう思う)		62.9%	63.1%
3.授業や単元の始まりに目標を確認することができた (①強くそう思う, ②そう思う)		57.1%	70.6%
4.授業や単元の終わりに目標の達成度を自己評価することができた (①強くそう思う, ②そう思う)		60.0%	69.0%
5.授業や家庭学習にICT機器を効果的に活用することができた (①強くそう思う, ②そう思う)		57.1%	61.5%
6.授業の中で課題解決に向けて自分から取り組んでいる (①強くそう思う, ②そう思う)		57.1%	65.2%
7.授業の中で各教科などで学んだことを生かしながら、自分の考えをまとめる活動を行った (①強くそう思う, ②そう思う)		62.9%	64.2%
8.他の生徒と話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考え方に気付いたりすることができた (①強くそう思う, ②そう思う)		68.6%	66.3%
9.学習した内容について、分かった点や、分からなかった点を見直し、次の学習につなげることができた (①強くそう思う, ②そう思う)		60.0%	66.8%

総合評価(学校としての今年度の成果と次年度の取組を含む)	
<p>今年度は、実習前の「30秒確認」や、作業後に改善点を1つ書く「ミニ振り返り」などを毎時間行ったことで、生徒が自分のつまづきに気付くやすくなり、次の授業で何を意識すればよいかを理解して行動できるようになった。この仕組みは工業科の実習で特に効果があり、作業の質が安定した。また、情報ではデータ処理や操作の基礎をしっかり扱う授業が生徒の自信につながり、高い成果が見られた。ただし、欠席した生徒のフォローが十分ではなく、授業に戻りづらい場面があったことや、教科ごとに授業のやり方に差があること、読解など基礎学力の差が大きいことが課題として残った。</p> <p>次年度は、欠席者に必要な内容をまとめて渡す仕組みや、短い追い付き指導を全教科でそろえて行うなど「学習の取りこぼしをつくらぬ体制」を整える。また、30秒確認やミニ振り返りの方法を他教科にも広げ、改善点を自分で考えて次の学習につなげる力を、全ての授業で育てていく。</p>	

各教科の取組		※左欄の取組テーマの実践を通して各教科の資質・能力を育成する。			
教科	生徒が身に付ける資質・能力	中間評価	年度末評価	課題解決のための次年度の取組	
国語	周囲の人間とのコミュニケーションに必要な語句や表現の知識を増やし、語彙力を高める。	4.1	3.6	生徒に必要な語句をしばって示し、短い復習を重ねながら語彙の定着を図る。また、学んだ語句を使って話したり説明したりする活動を取り入れ、周囲の人とやり取りする力を高めていく。	
	自分の意見や考えを的確に相手に伝えるために、適切な語句や表現を選択することができる。	3.9	3.9	意見発表や短いプレゼン活動を増やし、語句や表現の選び方を練習する場面を確保することで、生徒が自分の考えを分かりやすく伝えられる力を伸ばしていく。	
	身に付けた知識・能力を活用して、主体的に周囲の人間とコミュニケーションを図ることができる。	3.7	4.0	意見交換や協働作業の機会を増やし、学んだ知識や語彙を実際の対話で活用できるようにする。コミュニケーションが必要となる場面を授業の中で意図的につくり、生徒が自分から関わり、周囲と伝え合う力を伸ばしていく。	
地公	考察・選択・判断のための手掛かりとなる概念・理論を理解し、諸資料から必要な情報を適切かつ効果的に調べまとめる技能を身に付ける。	4.4	3.8	新聞や資料を使って必要な情報を調べ、要点を簡潔にまとめる活動を増やし、基本的な考え方を確認しながら自分で判断する力を伸ばしていく。	
	現実社会の諸課題の解決に向けて、事実を基に多面的・多角的に考察し公正に判断する力や、合意形成や社会参画を視野に入れながら構想したことを議論する力を養う。	3.8	4.1	社会の課題を扱う学習を増やし、事実にもとづいて多面的に考える力を伸ばす。また、話し合いの活動を取り入れ、意見をまとめた調整したりする経験を通して、公正に判断し議論できる力を育てていく。	
	よりよい社会の実現を視野に、現代社会の諸課題を主体的に解決しようとする態度を養うとともに、各国が相互に主権を尊重し、各国民が協力し合うことの大切さについての自覚などを深める。	3.8	4.3	社会の課題を身近な例から取り上げ、主体的に考える学習を増やす。また、各国が協力し合う大切さを理解できるように、資料や事例を活用して学習を進め、よりよい社会を考える態度を育てていく。	
数学	基礎基本の概念を理解し。数学的に処理するために数式化、図式化することができる。	4.1	3.5	基礎的な内容をしっかりと身に付けられるよう反復練習を行い、言葉・数式・図のつながりを意識した指導を進めることで、概念を正しく理解し数式化・図式化する力を伸ばしていく。	
	論理的に考え、他の事象と関連づけ、数学的に、簡潔、明瞭、的確に表現できる。	3.8	3.7	既習内容とのつながりを丁寧に示しながら指導を進め、規則性を見つめる活動を取り入れることで、論理的に考え、関係づけて表現する力をさらに伸ばしていく。	
	問題解決の過程を粘り強く考えたり、よりよい解決方法を見つめることができる。	3.6	3.9	思考の途中を丁寧に書く習慣を身に付けさせ、計算や理由付けの流れを振り返る活動を取り入れることで、問題解決の過程を粘り強く考え、よりよい方法を自分で見つけられる力を伸ばしていく。	
理科	自然現象を理解する上での基礎的な知識、および科学的探究のため必要となる方法や技能を身に付けていく。	4.4	4.1	自然現象を理解するための基礎知識をしっかりと身に付けられるよう教材を工夫し、観察や実験の場を増やす。さらに、結果をふり返りながら話し合う活動を取り入れ、科学的に考える力と探究の技能を伸ばしていく。	
	観察や実験の結果を科学的に考察し、簡潔・明瞭・的確に表現することができる。	4.3	4.4	観察や実験のあとに時間を確保して結果を話し合い、考察を深める活動を続けていく。また、結果や考えを整理して発表する場面を設け、科学的に分かりやすく表現する力を伸ばしていく。	
	興味・関心を抱いた分野について、主体的に探求し粘り強く考え深めていくこととする姿勢を持っている。	4.3	4.3	生徒の興味を引く話題や身近な事例を取り上げ、探究したいと思える学習のきっかけを増やす。また、振り返りシートなどを活用し、自分の疑問を深めて粘り強く考え続けられるよう支援し、主体的に探究する姿勢を育てていく。	
英語	まずPhonics(英語の発音のルール)でそれぞれの文字の発音のルールをマスターし、次に語と語のリンキングを学び、実習しリスニング力も向上させる。	4.5	3.9	授業冒頭のPhonics学習を継続しつつ、欠席や遅刻で学習が抜けた生徒への補充指導をより確実に行う。また、リンキングの練習を繰り返し取り入れ、発音と聞き取りの力をバランスよく伸ばしていく。	
	次にGDM(直接教授法)でア充てられたビクチャーを見て、母語である日本語を介さずに英語でその状況を説く。	4.2	4.2	GDMを使った指導を継続し、必要に応じて黒板での補足説明を加えるなど柔軟に対応しながら、英語だけで状況を説明する活動をより確実に行えるよう支援していく。	
	流行りの表現を丸暗記的に繰り返すのではなく、難しい表現や語をBasic English用いて優しい語に変えるなどして、ソフトランディングして導入して学習意欲を駆り立てる。	4.1	4.5	難しい表現をやさしい英語に言い換えて導入する工夫をさらに進め、生徒が無理なく理解を深められるよう支援していく。ソフトランディングを意識した説明を充実させ、学習意欲を高める指導を継続する。	
芸術	デザインを学ぶ上で、色彩について基礎的な知識を理解している。またレタリング技術においてカラスロを使いこなせるようになる。	5.0	4.6	色彩の基礎知識を生かして目的に合った色の選び方を学ばせるとともに、レタリングではカラスロの技能をさらに高めるための課題を設定し、表現の幅を広げていく。	
	インシャルをアレンジして「自分のマーク」をデザインすることを通じ、他者に見てもらいたいこと、自ら伝えたいことを表現できるようになる。	4.5	4.6	自分の考えや伝えたい内容をより表現できるよう、さまざまなデザイン例や制作の工夫を紹介し、表現方法の幅を広げる指導を行う。インシャルを使った作品づくりを通して、自己表現の楽しさをさらに実感できるように支援していく。	
	デザインを自ら創り出す喜びを見出し、集中して制作に取り組む姿勢と習慣を身に付けていく。	4.3	4.9	生徒が自分で新しい表現方法を試したくなるような教材や制作課題を用意し、創作の楽しさをさらに感じられる環境を整える。また、制作に集中して取り組めるよう、個々のペースに合った支援を行い、継続して制作に向かう姿勢を育てていく。	
家庭	生活を主体的に営むために必要な基礎的な理解を図るとともにそれらに係る技能を身につけることができる。	4.1	3.9	技能を手順分解したチェックリストとミニテストを導入し、単元内に再挑戦(再提出)機会を必ず設定する。欠席者には手順動画・写真資料でフォローし、年度後半の技能低下を防ぐ。	
	生活の中から問題を見出して課題、解決策について考え、論理的に表現し、生涯を見通して課題を解決することができる。	4.0	4.0	課題解決学習は維持できているため、「根拠一比較一提案」の型で思考を深める。実生活の制約条件(予算・時間・安全等)を入れた課題設定を行い、他場面への転移(家庭での実践)につなげる。	
	様々な人々と協働し、よりよい社会の構築に向けて、地域社会に参画しようとするとともに、自分や家庭、地域の生活の充実工場を図ろうとする実践的な態度を身につけることができる。	3.9	4.0	協働学習では役割分担を明確化し、ピア評価+自己評価で協働プロセスを可視化する。地域・学校内の依頼型課題に取り組み、参画の実感を伴う学びとして定着を図る。	
保体	各種の運動の特性に応じた技能等及び社会生活における健康・安全について理解するとともに、技能を身につけることができる。	4.2	3.9	運動の特性を踏まえて基本的な動きを丁寧に指導し、安全に配慮しながら技能を身に付けられるようとする。また、仲間と協力して運動する楽しさを実感できる場面を増やし、学習への意欲を高めていく。	
	運動や健康についての自他や社会の課題を発見し、合理的計画的な解決に向けて思考し判断するとともに他者に伝えることができる。	4.0	4.0	運動や健康に関する身近な課題を見つけて考える学習を行い、合理的に解決方法を考える力を育てる。また、考えた内容を仲間に分かりやすく伝える活動を取り入れ、自他の健康を守る意識と判断力を高めていく。	
	生涯にわたって継続して運動に親しむとともに、健康の保持増進と体力の向上を目指し、明るく豊かで活力ある生活を営むことができる。	3.8	4.3	自分の健康状態を理解しながら運動に取り組めるよう指導を行い、継続して運動する習慣づくりを支援する。健康づくりの効果を実感できる活動を取り入れ、生涯にわたって運動に親しむ姿勢を育てていく。	
情報		4.7	5.0	次年度も今年度と同様に、情報のしくみやネットワーク、データ処理の基礎知識を著実に扱い、コンピュータの基本操作を確実に習得できるように指導を続けていく。	
	1年次工業情報数理解で代替	4.7	5.0	次年度は、収集した情報を整理・分析して目的に合った表現につなげる活動を継続し、文章や資料、プログラムで分かりやすく伝える力をさらに伸ばしていく。	
		5.0	5.0	次年度は、副教材を活用した学習を継続し、情報社会の問題に関心をもち主体的に情報を扱えるよう指導していく。また、課題解決やグループ活動を通して協力して学ぶ姿勢をさらに育てていく。	
総探					
	4年次課題研究で代替				

各教科の取組		※左欄の取組テーマの実践を通して各教科の資質・能力を育成する。		
教科	生徒が身に付ける資質・能力	中間評価	年度末評価	課題解決のための次年度の取組
機械	工業の各分野に関する基礎的な知識や、工業の意義を理解し、「実習」や「課題研究」における加工や作品制作をとおして現代社会で活かせる知識及び技能を理解し、身に着ける。	3.9	3.0	実習の前に基礎知識や作業手順を短時間で確認し、作業後には簡単な振り返りを行わせる。小さな課題から段階的に進める学習方法を取り入れ、工業の基礎知識と技能を確実に身に付けられるよう支援していく。
	「知」「徳」「体」にわたる「いきる力」を育むため、工業の各分野に関する諸課題の解決を目指して思考を深め、基礎的・基本的な知識と・技術を基に、表現する創造的な能力を身に着ける。	3.8	3.2	実習の前に基礎知識と作業手順を簡潔に確認し、作業後には短い振り返りを行わせる。また、小さな課題から段階的に取り組ませることでつまずきを防ぎ、思考力・技能・創造的な表現力を着実に身に付けられるよう支援していく。
	工業技術に関する諸課題について関心をもち、その改善・向上を目指して、主体的に取り組もうとするとともに、実践的な態度を身に着け、人間性をより一層向上させようとする。	3.6	3.7	実習の中で生徒が自分の作業から小さな課題を見つけて改善する活動を取り入れ、作業後の短い振り返りで改善点を整理させる。主体的に課題へ向き合う姿勢を育て、工業技術に対する関心と実践的な態度をさらに高めていく。
電気	工業の各分野に関する基礎的な知識や、工業の意義を理解し、「実習」や「課題研究」における作品制作をとおして現代社会で活かせる知識及び技能を理解し、身に着ける。	4.0	3.6	実習の前に必要な基礎知識や作業手順を短く確認し、作業後には振り返りを行う時間を確保する。また、小さな実習課題から段階的に取り組ませることで、つまずきを防ぎ、電気技術の理解と技能の定着を確実にしていく。
	「知」「徳」「体」にわたる「いきる力」を育むため、工業の各分野に関する諸課題の解決を目指して思考を深め、基礎的・基本的な知識と・技術を基に、表現する創造的な能力を身に着ける。	3.6	4.1	実習前に基礎知識と作業手順を簡潔に確認し、作業後には短い振り返りを行わせる。また、小さな課題から段階的に取り組ませることでつまずきを防ぎ、電気に関する思考力・技能・主体的な改善態度を着実に育てていく。
	工業技術に関する諸課題について関心をもち、その改善・向上を目指して、主体的に取り組もうとするとともに、実践的な態度を身に着け、技術者として人間性をより一層向上させようとする。	3.5	4.1	実習の中で生徒が自分の作業から課題を一つ見つけて改善する活動を取り入れ、作業後の振り返りで改善点を整理させることで、工業技術への関心と主体的に取り組む態度をさらに育てていく。
建築	工業の各分野に関する基礎的な知識や、工業の意義を理解し、「実習」や「課題研究」における作品制作をとおして現代社会で活かせる知識及び技能を理解し、身に着ける。	3.8	3.4	実習や製図の前に必要な基礎知識と手順を短く確認し、作業後には振り返りの時間を取り入れる。また、小さな課題から段階的に学習を進めることでつまずきを防ぎ、建築の基礎知識と技能の定着を確実にしていく。
	「知」「徳」「体」にわたる「いきる力」を育むため、工業の各分野に関する諸課題の解決を目指して思考を深め、基礎的・基本的な知識と・技術を基に、表現する創造的な能力を身に着ける。	3.4	3.5	実習や製図の前に基礎知識と手順を簡潔に確認し、作業後には短い振り返りを行わせる。さらに、小さな課題から段階的に取り組ませることでつまずきを防ぎ、建築に関する思考力・技能・創造的な表現力を着実に身に付けられるよう支援していく。
	工業技術に関する諸課題について関心をもち、その改善・向上を目指して、主体的に取り組もうとするとともに、実践的な態度を身に着け、技術者として人間性をより一層向上させようとする。	3.2	3.9	実習や製図の中で生徒が自分の作業から課題を一つ見つけて改善する活動を取り入れ、作業後には短い振り返りで改善点を整理させる。段階的な課題設定によってつまずきを防ぎ、建築技術への関心と主体的に取り組む姿勢、そして実践的な態度をより確実に育てていく。
電子				
土木				